

A Cognitive and pragmatic Analysis of No More A and B Constructions

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/43377

No more A than B構文の認知言語学的・語用論的分析

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻

廣 田 篤

要旨

本稿は、比較構文や否定文の中でも、特にNo more A than Bという構文スキーマに焦点を当てた構文研究である。まず、構文の統語的特徴に基づいてNo more A than B構文を分類した上で、それらの意味上の差異を探った。その際、thanフレーズに注目し、具体的な例文を検討することで、それが<ある極端な性質を帯びた対象>として規定できることを示した。次に、No more A than B 構文特有の意味（<構文がもつスキーマ的な意味>）の創発メカニズムに関して、語用論的な観点からアプローチを試みた。構文の使用例を対話者間の発話場面（グラウンド）でのやりとり（インタラクション）という視点からみることで、構文がその場面で果たす機能が「間主観的な認識調整」にあると主張した。最後に、所謂クジラ構文を採り上げ、「間主観的な認識調整」とはどのようなものかに関して詳細に検討した。

キーワード

構文, 語用論, 間主観的認識調整

A Cognitive and pragmatic Analysis of No More A than B Constructions

HIROTA Atsushi

Abstract

In this paper, we will investigate in detail the nature of the *No more A than B* construction. First, we will see this construction classified into several categories based on the formal differences among them, and then, those corresponding semantic differences will be explored. In particular, we will focus consistently on *than*-phrases of *No more A than B* construction, which will turn out to be characterized through the actual usage of several sentences as objects or processes with an extreme property (i.e., they can be schematically stipulated as such). Next, it will be proposed that the essential function of this construction lies in the intersubjective coordination of a proposition between interlocutors, in terms of their interaction, and of a pragmatic perspective that will be newly introduced here. Finally, the *whale*-construction will be presented as a topic sentence that shows intersubjective coordination concerning a common conceptual ground between the speaker and the hearer. In other words, the interlocutors will negotiate how a whale should be categorized based on two different types of categorizations, which are distinct in the cognition of the speaker.

Keywords

construction, pragmatics, and intersubjective coordination

1. はじめに

クジラ構文 (即ち, A whale is no more a fish than a horse is. を代表例とする構文) を一つの類型とした No more A than B 構文に関して, これまで認知文法の観点から, あまり分析されてこなかった。その理由は, 一つには, 否定辞 No や Not が絡む認知構造図の視覚化が困難なこと, 即ち No や Not の表す意味を抽出し, それを視覚的に明示化するのが難しいことが挙げられる。もう一つは, 構文のスキーマを構成する要素が多いため, 最終的な高次レベルの合成構造が複雑になることが考えられる。そしてスロット A, B に実に多様な要素を取り得ることから, すべての事例に共通する性質は何かを統一的に把握することが容易ではないという側面がある。Langacker (1991: 132–141) において, 先駆的に否定の認知構造図が示されているものの, それが「否定とは存在の不在である」という認知的な枠組みを越えるものであるとは言い難い (cf. 無のプロファイル)。実際, 今仁 (2010) において象徴的に語られているように, 空っぽの空を見て「カモメが2羽飛んでいない」というのは奇妙である一方で, 「よし, 雨は降っていない, 出かけよう」という文は完全に自然な発話であり, 両者の差異は, 「存在の不在」として否定を規定するだけでは説明することができない。否定が何かを打ち消す (キャンセルする) ものだとしたら, そこで想定されているものは何であろうか。話し手の期待 (値) のようなものが存在するのだろうか。これは非常に難しい問題だが, 本稿では, No more A than B 構文を否定文 (否定現象) の理解のための端緒として扱い, 「否定」に対する一つの解釈の切り口を提示したいと思う。

2. No more A than B 構文の統語的なパターンとその分類

Hirota (2014) では, No more A than B 構文をその統語的特徴によって, いくつかのカテゴリ

ーに分類した。まずは, その分類体系を提示し, 議論の契機としたい。以下に示すパターンは, 完全に包括的ではないにせよ, 大まかな分類としてはある程度有用であると思われる。なお, 以下に挙げる例文のうち, BNCと付記してあるものは, すべて British National Corpus からの引用である。

(1) $S_1 V$ no more Adj than S_2 型

Trading across frontiers is no more strange than doing business with the shopkeeper next door. (BNC)

(2) $S_1 V$ no more O than S_2 型

You have no more freedom than us. (BNC)

(3) $S_1 V_1$ no more O than $S_2 V_2$ 型

Tromsø had no more snow than we had seen in the autumn, but it was colder. (BNC)

まずは, (1)から(3)を仔細に検討する。上記の3つの例文のいずれに於いても, than 以下に $S(V)$ に相当する要素が来ており, 互いに部分的に重なり合うような統語的類似性を示している。(1)では, 2つの事態を比較して, その事態の「自然さ」(あるいは「不自然さ」)について述べている。(2)は, Be + Adj の叙述ではなく VP として, you と we の2つの参与体についての「自由さ」の程度の差を表している。一方, (3)においては, 明示的に $S_1 V_1$ と $S_2 V_2$ が前景化しており, 「降雪量」に関して叙述されているが, 注意したいのはこの場合, than が関係代名詞の機能を担っていることである。文法的には, than 以下の要素に $S_2 V_2$ が現れなければ関係節にならないことは明かだが, 意味的には(2)も(3)と相同的であるといえる。

(4) $S V$ no more O_1 than O_2 型

Things that take up no more space than a cigarette packet can now have a vast amount of data. (BNC)

(4)のタイプは、「O₂ほどしかないO₁」の意味になる。(1)から(3)の場合とは違って、than以下の要素がS(V)に相当するものではなく、Oになるのが特徴である。例文はS (things) が関係節 (that 節) を従えており、その中身とSの関係が(4)の構文の型を示している。

(5) S₁ no more V₁ than S₂ V₂ 型

They no more held a patent on green ideas than feminists did on equal rights for women. (BNC)

(6) S₁ M no more V₁ than (S₂) V₂ 型

He could no more understand what went on in a twenty-year-old's head than fly to the moon. (BNC)

最後に、(5)と(6)のパターンを検討する。いずれもno moreに後続する形でV₁が現れるタイプである。(6)は、VがM (Modal) と共起する点で、(5)とは統語的に異なる。またMが現れる場合、than以下にV₂がS₂を伴わずに現れる頻度が高い。例文をみる限り、統語的な特徴よりむしろ意味的な差異の方が大きい、これについては次節で扱う。

3. No more A than B構文の意味的な広がり

と構文におけるthanの果たす機能

前節ではNo more A than B構文の統語的な特徴に注目し、6つのパターンに分類したが、それらの意味的な差異に関してより具体的に検討する必要がある。＜構文がもつスキーマ的な意味＞があるとしたら、どのようなものが考えられ得るか、ここでは特に構文の一要素であるthanの働きとの関係から考察を試みる。

説明の便宜上、先ず、(4)と(6)の例文を以下に再掲する。

(4) Things that take up no more space than a cigarette packet can now have a vast

amount of data. (BNC)

(6) He could no more understand what went on in a twenty-year-old's head than fly to the moon. (BNC)

(4)の例は、大容量のデータが今では煙草の箱ほどの大きさのモノの中に収容可能であることを表している。大容量のデータを保存するにはこれまでそれなりの大きさのハードディスクが必要だったことと比較して、それが今では「煙草の箱」くらいの小さなモノ（容器）で事足りるという＜対比＞の意味だが、この「煙草の箱」は、＜ある極端な性質を帯びた比較の対象（モノ）＞であるといえる。というのは、＜イマ＞との対比で、従来はそれ程小さいサイズの容器の中に大容量のデータを収容することは不可能とされてきたという含意が読み取れるからである。これはthan以下にNP（名詞句）をとる場合だが、(6)のようにVP（動詞句）をとる場合に於いても平行的である。(6)は、二十歳の若者の頭の仕組み（頭の中で起こっているコト）を理解することは、月まで飛んでいくのと同じくらい難しい（つまり、事実上不可能である）という＜対比＞の意味を表す文である。この場合も、「月まで飛んでいく」ことは＜ある極端な性質を帯びた比較の対象（プロセス）＞である。つまり、比較の対象がモノであれプロセスであれ、No more A than B構文はthan以下の要素で示される＜ある極端な性質を帯びた対象＞と比較して、「それと同じくらい～しかない」「それと同様に～できない」という否定の意味を表すと規定できる。一般化するにあたり、以下に例文をいくつか補充する¹⁾。

(7) She's no more sick than my big toe. (BNC)

(8) ... he admits that to pour abuse on a book like this makes no more sense than to kick a powder-puff. (BNC)

- (9) It would be a mistake for anyone to infer that Boulestin was a man who had no more sense than to attempt amateur cooking in his own restaurant. (BNC)

いずれの例に於いても、私の足の親指 (my big toe)、女々しい男に蹴りを見舞うこと (to kick a powder-puff)、自分がオーナーであるレストランで素人の料理を試しに出すこと (to attempt amateur cooking in his own restaurant) は、ある極端な性質を帯びた比較の対象であることが分かる。しかし、これらの拡張事例を説明するのに、than以下の要素を単に＜ある極端な性質を帯びた対象＞としてスキーマ的に規定するだけでは十分とはいえない。つまり、(7)において何故「彼女」の体調や気分が「私の足の親指」と同一の次元で比較されているのか、(8)において何故「この類の本をこきおろすこと」が「女々しい男に蹴りを見舞うこと」と密接に関連しているのか、説明ができない。そこで、次節において別の視点を導入し、違った角度からアプローチを試みる。

4. 「比較の語用論」という視点から構文の意味を捉え直す

少し遠回りになるが、始めに、比較構文の語用論とはいかなるものかについて、先行研究の一端を紹介したい。澤田 (2012) によれば、以下の2つの文はそれらが依拠する前提あるいは含意 (ニュアンス) の点で異なるとされる。

- (10) Taro is taller than Jiro. (太郎は次郎より背が高い)
 (11) Compared to Jiro, Taro is tall. (次郎に比べたら、太郎は背が高い)

両者の意味を比較、吟味すれば明らかなように、(10)は背の高さを中立的に比較 (つまり、＜背丈＞という尺度上のスケールにおいて、相対的に

大きいのはどちらかを叙述²⁾) しているのに対し、(11)においては、「次郎は背が低い」ことがいわば前提となっており、そこから導かれる帰結として「太郎は必ずしも背が高くない」という含意 (ニュアンス) が生じる。

以上の議論を基に、先ず、以下の(12)の文の成立可能性³⁾について述べた上で、もし成立するとしたら、そこにどのような含意が生じるかについて言及する。

- (12) Taro is no taller than Jiro.

BNCで検索した結果、S₁ is no taller than S₂ という形式は、かなり限定的ではあるが、特殊な文脈においては容認されることが判った⁴⁾。以下に、この形式が埋め込まれたコンテキストを示す。

- (13) He stood no taller than his daughter, probably she exceeded him by an inch or two, but he had the shoulders of a bull, and a great head of brindled brown hair laced with grey, like his short, square beard. (BNC)

(13)をよくみると、基本的には、父と娘の＜背丈＞に関して、程度の差がないという文であるが、本稿にとって重要なのは、むしろ probably 以下の後半の情報である。即ち、娘の方が1, 2インチだけ背が高く、加えて父は闘牛のような両肩をしていて、いかにも男性的 (masculine) な髪と髭を備えているという情報である。このような文脈では、父の方が娘よりも背が高い可能性はかなり高くなるにもかかわらず、実際はこの娘の方がおそらく少し背が高いことを、He stood no taller than his daughterという文は付加的 (ではあるが重要) な情報としてもっている。言い換えれば、娘の方が一般に父より背が低いという前提の下で、この父 (=「彼」) は自分の娘よりちっとも背が高くない、むしろ娘の身長を下回るくらいだと

いう含意が生じていることになる。このことから⑫は文法的であると言え、ただしその場合、「太郎は背が低いと思われる次郎よりもちっとも背が高くない」「次郎の背が高くないように、太郎の背は高くない」という意味を含む、と一般化できると考えられる。つまり、＜比較の「語用論」＞という名の如く、No more A than B 構文は＜構文がもつスキーマ的な意味＞として、話し手・聞き手を想定した上での、聞き手の予想に反する話し手の一見意外な主張を表すものとして捉えられる。

5. クジラ構文の意味と認知

前節末の主張を裏づける一例として挙げられるのは、所謂クジラ構文である。クジラ構文の最も代表的な例文は次のようなものである。

- ⑭ A whale is no more a fish than a horse is.
(ウマが魚類ではないように、クジラは魚類ではない)

この文を額面通りの意味に受け取れば、単に当たり前の事実を述べているだけのような気もするが、先ほど述べたような話し手・聞き手のインタラクションを想定すると、この文は「クジラは魚類である」という聞き手の予想（あるいは、思い込み）に対して、話し手がその命題（あるいは、誤信念）を修正しようと働きかけているのだと解釈できる。つまり、前節の主張に倣っていえば、「クジラが魚類でないことは、ウマが明らかに魚類でないことと同じくらい自明である」という話し手の認識が発話の動機づけとなっている。このような認識、認知の仕方は、実は、次のような概念操作的な基盤をもっていると考えられる。

- ⑮ ウマは魚類ではない・・・ウマは＜古典的カテゴリー観＞では魚類に分類されない
⑯ クジラは魚類ではない・・・クジラは＜プロ

トタイプ・カテゴリー観＞では魚類の周辺例である

クジラは一部の人たち（特に子ども）にとっては魚類の周辺例であるため、魚類なのかそうでないのか明確な判断ができないという文脈で、「ウマが魚類でないのだから、クジラが魚類でないのは明らかだ（クジラは魚類ではない。というのはウマが魚類ではないことから明らかである）」と話し手は聞き手に対して認知的に間主観的な認識調整を促しているというわけである。

また、上記の2つのカテゴリー観から別の認知のあり様もクジラ構文の意味に潜在していることが分かる。

- ⑰ ウマは哺乳類のプロトタイプである。

- ⑱ クジラは哺乳類の周辺例である。

これを基にすると、クジラ構文においては、「ウマとクジラを同じ哺乳類としてみたときにちっとも程度の差がない」という認知的な捉え方の修正を、話し手が聞き手に迫っているという解釈も成り立つ。

このように考えると、No more A than B構文における than 以下の要素は、話し手・聞き手の発話（インタラクション）の場における「間主観的な認識調整のための方略」として用いられているといえる。したがって、3節でみた「私の足の親指」や「女々しい男に蹴りを見舞う」というのは、一種の隠喩（メタファー）として解釈できる。私たちは、既に明らかなことを改めて相手に対して明示的に伝えるために、ときにメタファーを使う。本来メタファーとして機能していた形式が慣習化されると、その意味は意味論的な意味の中に組み込まれるため、逆にいえば、十分慣習化されていないメタファー表現はそれだけで聞き手に相当のインパクトを与える。クジラ構文において

は、メタファーとしての機能は希薄化しているものの、聞き手に対するインパクトはある程度保持されているといえる。ある表現がメタファーとして解釈されるか、そうでないものとして解釈されるかはおそらく連続的で、両者のあいだに明確な境界線を引くことはできないだろう。なお、紙幅の都合上、クジラ構文の意味と認知については、別稿で詳細に論じる⁵⁾。

6. 結び

本稿では、まず、No more A than B構文を統語的な特徴を基に6つのボタンに分類し、それぞれのボタンの表す意味的な特徴を探った。その結果、than以下の要素が<ある極端な性質を帯びた対象(モノ・プロセス)>としてスキーマ的に規定できることが分かった。しかし一方で、そのような規定だけでは説明できないメタファー表現が存在し、それらの表現を包括するような共通の意味的な特徴を明らかにする必要が生じた。そこで、No more A than B構文特有の意味の創発メカニズムに関して、主に語用論的な観点から新しく分析を試みた。そのように、構文の使用例を話し手・聞き手の発話場面(グラウンド)でのやりとり(インタラクション)という視点からみることで、構文がその場で果たす機能的な側面(間主観的な認識調整という機能をもつこと)が、部分的にはあるが明らかになった。最後に、No more A than B構文の一つの事例としてクジラ構文を探り上げ、上記の分析の妥当性をチェックした。今後の展望としては、No more A than B構文のスキーマやプロトタイプの特定、構文ネットワークの構築といった問題に取り組むたい。

【注】

- 1) 例文(7)~(9)だけでなく、第2節でとり挙げた例文はどれも、than以下の要素が<ある極端な性質を帯びた対象>として規定され得る。例えば、例文(3)において、秋に雪が降ることは通常かなり稀である。
- 2) 「叙述」というのは言葉で以て、対象世界の一部を切りとることのように思いがちだが、Taro is taller than Jiro. (太郎は次郎より背が高い) という文ですら、対話者間でのやりとりという観点からすれば、それ以上の意味が含まれている。即ち、「尺度上のスケール」というのは説明のための便宜的な純粹概念である。
- 3) 例文(2)は筆者による作例である。インフォーマントによると、(2)は文法的に正しい(grammatically correct)が、文脈は限定的とのことである。
- 4) 正確にはbe動詞ではなくstandの過去形stoodだが、どちらも状態を表す動詞なので、本稿では同様の意味を表すものとして扱うことにする。
- 5) 「クジラ構文の意味と認知」については、廣田篤(to appear)を参照。

【主要参考文献】

- Alrenga, Peter, Christopher Kennedy, and Jason Merchant (2012) *A New Standard of Comparison*, in Nathan Arnett and Ryan Benett (eds.), *Proceedings of the 30th West Coast Conference on Formal Linguistics*: pp. 32–42, Cascadia Proceeding Project, Somerville, MA.
- Bybee, Joan (2010) *Language, Usage, and Cognition*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 今仁生美 (2010) 「否定の諸相」, 澤田治美編 『ひつじ意味論講座 第1巻 語・文と文法カテゴリーの意味』, ひつじ書房, 東京.
- Hirota, Atsushi (2014) *A Cognitive Analysis of No more A than B Construction*, 金沢大学大学院人間社会環境研究科修士論文
- 廣田篤 (to appear) 「No more A than B構文の認知意味論 ―クジラ構文の意味と認知―」
- 河上誓作編著 (1996) 『認知言語学の基礎』, 研究社, 東京.

- Kennedy, Christopher (2007) *Modes of Comparison*, in Malcolm Elliott, James Kirby, Osamu Sawada, Eleni Staraki, and Suwon Yoon (eds.), CLS 43, pp.141 – 165, Chicago Linguistic Society, Chicago.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar*, vol.2: *Descriptive Application*, Stanford University Press, Stanford.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford University Press, Oxford.
- Langacker, Ronald W. (2009) *Investigation in Cognitive Grammar*, Mouton de Gruyter, Berlin・New York
- 中村芳久 (1993) 「構文の認知構造ネットワーク—全域的な言語理論を求めて—」『言語学の眺望』, 福岡言語研究会編.
- 中村芳久 (2010) 「否定と〈間〉主観性」, 加藤泰彦・吉村あき子・今仁生美編『否定と言語理論』, pp. 424–442, 開拓社, 東京.
- 太田朗 (1980) 『否定の意味』, 大修館書店, 東京.
- 澤田治 (2012) 「比較構文の語用論」, 澤田治美編『ひつじ意味論講座 第2巻 構文と意味』, ひつじ書房, 東京.
- Tomasello, Michael (2003) Introduction: *Cognitive and Functional Approaches to Language Structure*, in Tomasello, Michael (ed.), *The New Psychology of Language*, vol.2, Lawrence Eelbaum Associates, Mahwah, New Jersey.
- Verhagen, Arie (2005) *Constructions of intersubjectivity: Discourse, Syntax, and Cognition*, Oxford University Press, Oxford.
- 山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』, くろしお出版, 東京.
- 吉村公宏 (2004) 『はじめての認知言語学』, 研究社, 東京.